

まちの史跡めぐり……(85)

町文化財専門委員 石瀧 豊美

古新聞切抜帳から…(3)

=福岡日日新聞と福陵新報・九州日報=

明治時代の新聞から、当時の須恵村関係の記事を掲載しています。

◆ 明治30年7月18日(福陵)

●馬車鉄道布設の特許 粕屋郡須恵村大字須恵五百五十番地吉松芳之助外七名より出願にかゝる、筑紫郡千代村字水茶屋より粕屋郡箱崎町字馬場に至る間、并に右水茶屋より分岐して同郡仲原村字扇に至る間に、馬車鉄道を布設し運輸の業を営む事は、去九日を以て内務大臣より特許せられたりと云ふ。右馬車鉄道は合資会社の組織にして、資本金は六万円なり。二ヶ年の予算は収入壹万七千六十四円にして、支出五千三百円なり。差引壹万七千七百六十四円の利益にして、之より積立金、賞与金、及び純益の一割を積立つる時は、差引九千円の配当額をなし得る予算にて、尚之を資本金に対する時は、壹割五歩の配当なりと云ふ。

明治32年11月15日(福陵)

●桜原海軍炭坑の瓦斯発生 粕屋郡須恵村桜原海軍炭坑に於て、去月三十日頭領以下五名瓦斯に打たれ、重傷二名、軽傷三名を出したることは、当時の紙上を以て報道したるが、今又今月五六日の頃、同坑内第廿七卸し切派に於て、

広島県豊田郡濃美村、当時同坑に出稼せる吉川ヨシ(十七)なるもの、瓦斯に打たれ、面部其他四肢に重傷を負ひしとの事なり。元来同炭坑は常に瓦斯気多く、屢々罹災者あるに拘はらず、完全なる扇風機の設けなく、且つ安全灯を使用すること殆んど稀にして、何分にも危険を避くるの装置頗る不十分なるのみならず、日常業務の如きも、受負人等に放任しある趣なり。

斯る次第なるを以て、屢々坑内に罹災者を出すは当然のことにて、此際充分の改善を図るにあらずれば、今後尚災害に罹るものなきを保すべからずと云ふものあり。

明治33年2月18日(九日)

●損害賠償事件纏る 粕屋郡須恵村なる新原海軍探炭所近傍の田地は、採炭の結果亀裂して田地の用をなさず、止むを得ず畑地に転換するに至り、既往将来に於て其損害少からざるを以て、被害者飛来吉太氏外五名は、去る廿六年を以て、之れが損害賠償を其筋に要求せり。爾来県庁の取扱にて、双方に対し屢々交渉を重ねたる末、今般其筋よりは被害者要求額の通り、損害高十分の五、則ち千九十六円三十一銭を下渡すことゝなり、全く落着きたりと云ふ。因に

記す。被害反別一町二反八畝廿八歩なりと。

明治36年4月15日(九日)

●瓦斯爆発 負傷者七名 糟屋郡須恵村植木炭坑内の第三片にては、昨十三日午前十時三十分頃瓦斯爆発せしため、従業員中の坑夫今泉善太郎外七名は火傷したりとの報あり。

明治36年12月5日(九日)

●稲株切断実績 粕屋郡宇美村、及須恵村の一部に於ける、三化性螟虫駆除として、稲株切断を施行せしは本年始めにして、当局者の督励と、当業者の奮発とによりて、頗る良好なる成績を得たる由。其切断反別は、四十四町七反一畝十二歩、内須恵村三十七町二反二畝二歩、宇美村七町五反十歩。又切断反別の筆数は五百八十筆、内須恵村四百四十二筆、宇美村百五十八筆にして、去月廿三日を以て悉皆結了せり。

明治37年5月24日(九日)

●大蛇を生捕る 粕屋郡須恵村大字佐谷川上字シヨウケゴシと云へる深山幽谷にては、大蛇其他恐ろしき動物の棲息し居ると言ひ伝へ来たるが、去る十八日、宇美村大字仲ノ原小林松次郎(三十六)が同山径を通り掛かれる時、

久我記念美術館

5月企画展 5月3日(月)~23日(日)
〔6日(木)と以後の月曜休館〕



伴 信行 書展

美術館の5月企画展は、佐谷在住の伴信行さんの書展です。漢詩・禅語・近代詩文・自詠の歌・俳句および謡曲から取り入れた和歌などの書、約50点を展示いたします。

『見せびらかしの書であつてはならない。内なるものを求めよ』とは、師匠小森俱戴先生の理念でした。これはまた、師の先達者、八尋壑泉氏(西日本新聞の題字揮毫者)より受け継がれているようでもあります。従って、中央の書道団体に属したこともなく、大きな書展に出品したこともありません。いわゆる無所属で、多くの人が持っておられる書歴などありません。強いて挙げれば、書友展が七回、県展での入選が十三回で、賞など縁遠き者です。ただただ、中国・日本の古典追求に没頭し、内なるものを求めてきました。

だが、このような勉強の仕方も六十歳までで、この十年間は、自由で楽しい書をと心掛けてきました。でも、私から書の古典はどうしても手放すことは出来ず、斬新さとか、近代性とかは乏しいものに固まっていく傾向になりました。現今、書道界で問われている作品の類型化・系列化だけは御免です。また、私なりに『師匠に似れば似るほど自分は失われていることでもある』という信念をもって、今日に至りました。

わか町には、立派な美術館があるし、ここで一度遊ばしていただこうかと思いついたのが、七十歳に達してからです。そのときの心境を詠んだのが、写真掲載の自詠歌です。

これで書を始めて五十年。今後の「書に生きる人生」の糧にいたしたく、多くのお方のご来館ご批評を賜りますようお願い申し上げます。

七十を過ぎ来しよりの書跡とて墨磨りつつも想いを探る 自詠



如是



金は良い召使いでもあるが
悪い主人でもある

4月の企画展

4月3日(土)から29日(木)まで『盲者の記憶
〜人体素描三人展〜』を開催します。